BOLETIM INFORMATIVO INTERNO (GRATUITO) **A・C・A IWATE KENJINKAI DO BRASIL**

ブラジル岩手県人会ニュース 136号 2006年1月発行

RUA THOMAZ GONZAGA, 95-M - LIBERDADE - SÃO PAULO - SP - BRASIL CEP 01506-020
TEL: (11) 3207-2383 • FAX: (11) 3277-0403 • E-Mail: iwate@iwate.org.br • www.iwate.org.br

自助努力の年に

ブラジル県人会長　千田曠曉

新年明けましておめでとうございます。
会員の皆様には大きな夢と希望の中で、新しい元日をご家族揃って健やかにお迎えされた事とお慶び申し上げます。

県人会は会員皆様のご理解とご支援のお蔭で、昨年は能力以上とも云える活動が出来ました事を、心より感謝申し上げます。

県人会員一同

2008年には日本移民100周年、県人会創立50周年を迎えますが、おそらく一世主導による式典は、県人子弟の応援を得てもこれが最後になると思いまが、その前に一世に課せられた課題があると思います。賢明な諸氏には既に念頭にあると思いますが、移住者の宝である次世代の育成が県人会にとっても大変重要な事だと思います。

今後県人会活動はじめ会館維持、諸経費の捻出なども自分たちが「自助努力」して活動を継続出来るような県人会に育てる事が、会継承の道につながるのではないでしょうか。

母県においては、ブラジル県人会賛助会員皆様が多くの賛意を得て「賛助会員の会」を設立発会しました。これはブラジル県人会に対する大きな期待が含まれていると思います。

こうした観点から今年は「自助努力」を、県人会のスローガンとして掲げ、一致団結して盛り上げようではありませんか。宜しくお願い致します。

忘年会・マジックショー

12月11日県人会最後の行事である忘年会と、第30回を迎える会員交流懇親会は、特別アトラクションとして「マジックショー」もあり、大盛会で120名余の参加者があった。

多田マウロ副会長の司会で開会、先没者への黙祷千田会長の1年間お世話になった感謝の挨拶、JICA派遣ボランテイア及川さおりさん（江刺市出身）から新年早々の帰国を前に、得意な毛筆で書かれた額「胡馬北風」が県人会に贈られ、大変お世話になったとの挨拶があった。

田口信二顧問の音頭で乾杯、会員特製の持ち寄り料理に刺身・金宝丸の蟹などで豪華な宴会となり、久しぶりの再会を喜ぶ光景が見られた。

マジックショーはテレビでも紹介された日系3人のグループで、パウリスタ大通りにあるガゼッタ劇場で公演を行っている。観客も参加して、様々な手品が披露され巧妙なショーに魅了され楽しい一時を過ごした。

続いて、9月から12月生まれの高齢者の誕生会ではケーキを囲みハッピーバースディを皆で歌い長寿を祝った。また、ピラポ県人会から頂いた大豆や佐々木憲輔理事提供のピーナツが贈られた。沢山の賞品で青年部によるビンゴがあり、数字が出るたびに一喜一憂全員に賞品がゆきわたるまで行われた。その後、藤堂勝次長老自慢の歌でカラオケが始まり若い人たちは夕刻まで楽しんでいた。

※「胡馬北風」（こばほくふう）中国の故事で、北風が吹くと、北方で産まれた馬は故郷が恋しくなるの意味。

賀状をありがとう

（敬称略）

増田寛也知事、吉田重雄（賛助会会長）苫米地静子、菅原祐介（イグアス）、岩崎雄亮（ニューヨーク）、菅原圓雄、松本定次郎・トミ、武藤嵩　（アスンション）、杉村新、和美宏幸、久慈浩介、トロント県人会員一同（あげますて　おめでどがんす）、工藤久義（海自）、佐々木昌文（海自）、稲葉比呂子（国際課長）、増田稲子、吉田恭子、大志田諭、小関浩喜、小田島栄（交流協会理事長）、久慈浩介、杉村新、高橋紀雄（金ヶ崎町長）、その他、都道府県人会、コロニア社会より多数。

県人会の動き

（2005年 12月）

1	パラグアイ・ラパス移住地在住の鈴木勝男氏著自分史「思い出ずるままに」を県人会H・Pへ掲載認可の問い合わせを発送。
2	県連執行部会に会長出席。
4	留研生会（ACEBEX）忘年会に会長夫妻出席。
5	多田マウロ副会長よりポ語原稿受信。
6	会報原稿135号をニッケイ印刷に入稿。
7	菅原圓雄氏より手紙。
8	千田会長、総領事公邸に於いて開かれた天皇誕生祝賀昼食会に出席（出席300名ほど）
9	会報135号仮刷りの校正を行う。 ☆ 年賀状を関係者へ180通発送。
10	太鼓教室の練習・忘年会あり。 ☆ N・Y岩手県人会岩崎会長より賀状。懇親会写真に「ブラジル県人会の皆さん良いお年を」と。
11	忘年会前に定例役員会開催。議題は、新年会、総会準備、県人会50周年などについて。 ☆ 正午より忘年会・第30回交流懇親誕生会開催。
13	県連執行部会に会長出席。 ☆ 増田寛也県知事より賀状受領。
15	12月度県連代表者会議に会長出席。県連忘年会に千田会長夫妻、多田・藤村両副会長、山道事務局長が出席。
16	苫米地さんの「ハルとナツ」を観ての感想文が15日16日付ニッケイ新聞に掲載される。
19	岩手カラオケ愛好会の忘年会。 ☆ 菅原圓雄氏より賛助会員の集いあれこれ。
20	会報135号を国内外へ410部発送。
21	海外県人会、母県へ写真添付の賀状をメール。
23	吉田重雄氏（賛助会員の会々長）より賀状受信。
26	1月の役員会・総会・新年会の案内状を発送。 ☆ 藤村副会長、高畑理事にて金宝丸訪問。 ☆ 稲葉比呂子県国際課統括課長より、賀状のお礼と現国際交流プラザは盛岡駅西口のアイーナ内に来年4月移転、県国際交流センターとして海外県人会の活動を紹介したいとメール。
28	広報金ヶ崎受信。 ☆ 金宝丸の森漁勞長来館。
30	昆野会計理事、会計処理を行う。
31	リベルダーデ広場で恒例の餅搗大会（り商工会主催）が行われ、紅白の餅やお雑煮が振るまわれた。

餅搗大会

会費納入者名（敬称略）

武藤 徳雄（記載漏れ4月20日納入）
佐々木 明夫（累計157名）

寄付・寄贈

高橋 巳之吉 様	お茶菓子
金宝丸（森茂四漁勞長）様	蟹4箱

掲示板

会報の小スペースをご利用下さい。

（例） 土地や家屋、中古品、その他の売買など。
県人関係の尋ね人など。
※ 申し込みは県人会へ。

岩手県人会ホールをご利用下さい。

場所 東洋街の中心地で治安の良い場所。
Rua Tomaz Gonzaga 95番 Liberdade S.P
広さ 200名収容可能。調理場あり。
平日は時間貸しも可。
詳細は岩手県人会へ 電話=3207−2383

ビデオの予約を

ボランテイアでこの一年県人会の映像を取材された畑勝喜氏に心から感謝申し上げたい。きっと素晴らしい「県人会ビデオレポート2005」が出来る事でしょう。ビデオの予約を受付ております。申し込みは県人会へ。

♥ブラジル県人会の賛助会員になりませんか？♥

（2004年3月開設）

2005年12月2日には「ブラジル岩手県人会・賛助会員の会」が盛岡で、会員同志と県人会との交流活動を目的に発足しました。

- ♥ ブラジルと日本・海外との親善交流を目的に賛助会員制度を設けております。
- ♥ ブラジルに関心ある方すべてご入会できます。
- ♥ 入会金 2.000 円（賛助会員証贈呈）
  年会費（A） 3.000 円（B） 5.000 円
  ご予算により、A・Bを選べ、幾口でも可能で複数年会費納入も賜ります。
- ♥ 提供 ユニークな県人会報（6頁、毎月発行）
  シルバー移住、観光、その他の情報。及びビデオ「県人会活動の記録（有料）」
- ♥ お問い合わせは、お手紙、FAX，メールで、
  ホームページでもご覧になれます。

母県で「賛助会員」集う

藤村勝己事務局長より

「役員及び出席者名簿」
（敬称略）
会長－吉田重雄、副会長－清水泰宏、菅原圓雄、吉田恭子、高橋薫、事務局長－藤村勝巳、事務局次長－高橋満男、顧問－小田島栄、来賓－桶下正信、工藤明雄、会員－吉田英子、一戸和、坂本洋、松本トミ、藤村秋夫

ごあいさつ

新年明けましておめでとうございます。

日頃のブラジル岩手県人会のすばらしい、ご活動に対し心より敬意を表します。

さて、去る12月、関係各位からのご助言もあり「ブラジル岩手県人会賛助会員の会」を設立致しました。会員相互の親睦、交流、情報交換等を目的としていますが、何分にも発足して間もなく手探り状態であります。つきましては、貴御本家のご指導を頂きながら、まず賛助会員の拡大増強などのお手伝いから始めたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

昨年、ＮＨＫテレビドラマ「ハルとナツ」が放送され、多くの人が感銘を受けましたことは記憶に新しいことですが、あらゆる困難を乗り越え日本人移住100周年を迎えようとしています。今後さらに経済、文化はもとよりあらゆる面において日伯の親善交流の実が深まるものと確信しております。

最後に、貴岩手県人会のますますのご繁栄を祈念し、賛助会員の会設立のご報告と新年のご挨拶といたします。

２００６年1月４日

ブラジル岩手県人会賛助会員の会　会長　　吉田　重雄

「ブラジル岩手県人会賛助会員の会発会式」が、12月2日盛岡市内「エスポアール岩手」で12名の賛助会員が集まり開かれた。

式には県議桶下正信氏の祝辞挨拶、県庁から工藤明夫主事が稲葉比呂子文化国際課統括課長の祝辞を代読され、故国の留守家族と岩手県人会の「橋渡し役」として当会の役割の大切さと大きな関心と期待を寄せるものであり、県政、行政の立場から支援をしてしていきたいと述べられていました。これまで岩手県や団体の支援のもと留守家族会が存在していましたが、時代の変遷につれ、活動が弱まってきた中で関係者が、交流の重要性を鑑み、自主的に立ち上げられたことは、形こそ違え意義深いものがあると参会者は勿論のこと、メッセージを送ってくれました賛助会員一同再認識致しました。

千田県人会長の祝辞が披露された後、規約、役員選出などの議題審議に入り、役員選出では移民行政に長年関わった吉田重雄氏が満場一致で初代会長に選出され、今後、会の活発な運営に邁進したいと力強い就任の挨拶がありました。また緊急提案として賛助会員が最も多い金ヶ崎町の高橋薫氏が副会長に推挙され承認されました。

会の規約は吉田恭子さんが原案を作成しましたが、これも満場一致で承認されました。

審議終了後、参加者全員が¨ブラきち¨自慢など、ブラジルとのこれまでの関わりを自己紹介し、写真撮影、懇親会に移りました。県国際交流協会小田島栄理事長の乾杯の発声で始まり、今後会の活動の方向について活発な意見が交わされました。中でも移民100周年及び県人会50周年式典開催時のブラジル訪問の話題で大いに盛り上がりました。

また席上、小田島理事長が今後、理事長は会の顧問に自動的に就任するよう申し送りしていくことを約束され、会場は拍手喝采でした。

岩泉町の八重樫協二様が欠席にも拘わらず、奥様にお祝い金を届けて頂き、参会者一同感謝致しました。次回は、活動計画について話し合おうと誓い清水泰宏氏の中締めで散会しました。

「賛助会員の会」発足に出席出来なかった会員18名より会発足賛成、盛会を祈りますとメッセージがありました。

（注）ブラジル県人会の賛助会員は、母県岩手の他神奈川２名、静岡１名、大阪１名、ニューヨーク２名と広域な協力を得ている。

県人パイオニアと研修生を訪ねる ビデオ収録の旅

3

思い出のパラナバイ

文　畑　勝喜　　写真　藤村　光夫

かって、日本人一世達が第一線で活躍していた頃、日本人の住む都市には日系の銀行や産業組合がありそこで情報が得られたが、両組織共消滅した現在、唯一インフォメーションを得られる可能性のある所は、日系人の文化協会である。

パラナバイの文協で、岩手県人の所在を聞いてみたが分からない。ブラジル人の青年が、文協役員達何人かに電話をしてくれたが、日曜日で連絡が取れず諦めかけていた時、ようやく奥さんが岩手の人と云う情報が入り、ご主人に文協まで迎えに来て頂く事になった。

案内される車の中で、私は46年前初めてパラナバイを訪ねた日の事を思い出していた。東京の新聞社から派遣されて来ていた私に「ブラジルのコーヒー樹が、最近スマトラ種からノーボ・ムンド種に代って来ているが、その理由と背景を探（と）れ」という“ヒマダネ”の取材指令が入った。“ヒマダネ”とは、紙面に穴があいた時等に挿入する緊急性皆無の文字通り“隙種”の事である。

私は早速カンピーナスの農事試験場で取材し、次に生産者の声を聞くべく、北パラナへ飛んだのである。日本から来て5ヵ月目、これが同地方への最初の取材行であった。

報道カメラマン当時の若き筆者

パラナバイの町は建設途上で、中央をやたらに広い大通りが貫き、両側に西部劇を思わす様な商店がポツリポツリと建つ、何となくホコリッぽい町であったと記憶している。その日も取材を終え冷えたビールを飲んでいると、隣のテーブルに恰幅の良いつるつる頭にベレー帽を乗せた男が居り、どこかで見た顔だが思い出せないでいた。やがて私の前にドッカと腰を下ろし「あんた、ソルテイロ（独身）か」と、いきなり話しかけてきた。「えェ・・・まァ・・・」と私。

「そりゃいかん!ブラジルでソルテイロは信用がないから、バンコ（銀行）へ行っても、金も貸さん!」「ヨのパレンチ（自分の身内）に、心の優しい娘が居る。今看護婦をしちょるがのウ」。当時の青年たちは皆“白衣の天使”には憧れを抱いていたものだ。「どうだ見合いをしてみんかっ!」それにしてもあまりに唐突な話ではないか。真意を計りかね黙していると「まァ、会うだけ会ってみるというのはどうか、明日段取りをつけるから!」たたみかける様な強引さである。

「アノー、ボクは一年の期限付きで来ている身で・・・モゴモゴ・・・」実はブラジルへ来て一ヵ月位の頃、断り切れない事情の人から結婚式の写真を頼まれ、報道カメラマンの目で観た写真で良いのなら、という条件付きでアルバムを作った事があった。

その時の花婿がパラナバイの人で、彼はその伯父だと名乗った。道理でどこかで見ていた筈である。彼はその時の写真のアングルが斬新で、とても気に入ったと云った。

私の人生の中で「お見合い」話が出たのは、この一回だけであった．と若き日に思いを馳せているうちに味田家に到着した。

高い白塀に囲まれ立派な門構えのお屋敷で、門を入ると奥まった所に建つ母屋まで真直ぐ道が続き、その右側には広い花畑、左側は熱帯果樹園の趣で、大きな木々には枝もたわわに果物がなっている。

「私は、日本の事は何も知らないので・・・」こう言って口を開いたのり子さん（旧姓八重樫）は、1928年（昭和3年）花巻で生まれ1934年（昭和9年）満6歳で渡伯した。いわゆる準二世と呼ばれる世代である。父親は日本からの旋盤工で、バストスの大きな製材所の呼び寄せ移民。技術移民の草分けとも云えようか。

のり子さんはバストス市内で学校を終えブラタク製糸に就職し糸繰り工として働いた。当時この工場には移民後に夫を亡くした人や、離婚した人等、多くの日本人女性が働いていたと云う。1941年（昭和16年）第二次大戦が勃発。やがて製糸工場も無くなるという噂が流れ、町を出て行く人が続出し、バストスは不景気になっていった。

こうした中で、のり子さんに「見合い」の話が持ち込まれ、トントン拍子にまとまり華燭の典を挙げた。のり子さん24歳・Anibal 守蔵氏28歳の時である。

その頃、守蔵氏はパラナ州ロンドリーナ市の靴屋の店員。借家での甘い新婚生活が始まった。ところが4ヵ月後、店の支配人から、パラナバイ支店へ行けとの命令が出されて単身赴任。当時ロンドリーナ・パラナバイ間はバスで2日もかかる北パラナの開拓前線というか、僻地であった。

「バスの往復だけで4日もかかる。家内に逢いたくても店を1週間も空ける訳にもいかず、本当に辛い思いをしました」とは守蔵氏の弁。

そして、知人や友人も居ないロンドリーナに唯一人残されたのり子さんは本当に心細い思いをしたと言う。しかしやり手の守蔵氏は、一年でこの靴屋を自分のものにしのり子さんを迎えたのであった。「主人と一緒に暮らせる様になったのは嬉しかったけど、アスファルトもなく、雨が降ればドロ沼となる道路。水道も無く夜の10時で電気が消えてしまうという、辛い生活でした」のり子さんはこう振り返る。

開拓前線では、勿論シャレた靴ナド売れる訳もなく、もっぱらサパトンと呼ばれた労働靴を売りまくった。こうしてパラナバイの発展と共に成長を続けて来た味田靴店は、今や北パラナ全域に20軒近くの店舗を持ち、長男が総支配人、長女は本店長として活躍している。味田夫妻には4人の子供、9人の孫が居り、2002年には子供たちが盛大に金婚式を祝ってくれたと嬉しそうに語った。

「仕事の事には一切タッチせず、私は4人の子供を一人前に育てる事に専念出来ました。小さい子供をかかえて苦労はしましたが、でも主人と結婚して幸せでした」のり子さんはこう言って微笑んだ。岩手の女性は辛抱強いと言われるが、のり子さんには確かに岩手の血が流れている。

のり子さんとAnibal 守蔵さん

現在、子供たちに実権をゆずり、ご主人は好きな園芸に。夫人は華道池坊や花柳流の日本舞踊を楽しんでいる。「子育てに精一杯で旅行も出来なかったので」と、今は二人で旅行へも行き「楽しい老後」を十分にエンジョイしている味田夫妻であった。

あのホコリッぽかった町は、今、人口73,000人。豊かな緑の中に高層ビルも建つ静かな近代都市に変容した。もし、あの時「お見合い」し結婚していたら私の人生はどう変わっていたのだろう。ホテルの窓からボンヤリ外を眺めていた時、背後から藤村副会長の声がした。「そろそろ出発しますか」、そう今日10月23日は、ロンドリーナへの移動日なのであった。

（以下次号へつづく）

千貫石堤　金ヶ崎町

この堤は天和２年（1682年）伊達藩の川田勘祐によって10年の歳月をかけて造られた。起工以来毎年堤が決壊したので川田は沿岸から若い女を買ってきて牛とともに生贄（ひとばしらともいう）にしたという。以来川田家は呪われ、また堤が切れるたびに祟りが起こったといわれる。

現在は水神および人柱を祀るために観音像が建立されている。なお、この堤は昭和５年の再築で2.000 haの水田を潤し31haの水面は奥羽の山並みを四季ごとに映し、鳥が舞い、魚がすみその風景はまさに一幅の名画である。

民芸品　和紙鬼剣舞面、味自慢　銘菓千貫石、キジの里、芸能とまつり　鬼剣舞、鹿踊り

Associação Cultural e Assistencial Iwate Kenjinkai do Brasil

イワテジン岩手県人会

RUA THOMAZ GONZAGA, 95-M - CEP 01506-020 - LIBERDADE - SÃO PAULO - BRASIL
TELEFONE 55 (11) 3207-2383 – FAX 55 (11) 3277-0403
www.iwate.org.br – e-mail: iwate@iwate.org.br

IMPRESSO